でこぼこ触って認知症を診断

岡山大開発「問診より客観的」

認知症の早期診断に指先の触覚を使う方法を、岡山大大学院の呉景龍教授らのチームが開発した。岡山大が28日、発表した。いま主流の問診テストより客観的に診断できる可能性があるという。成果は近く米専門誌に掲載される。

呉教授らは、指先で物の形を認識する際、脳の多くの領域が活動する点に注目。認知症の早期診断に使えないかと考えた。

実験では「∧」の形が立体的に浮き出た4㌢四方のアクリルプレートを作成。「∧」の折れ曲がった部分の角度は60度～110度の9種類を用意し、目隠しをした被験者に、60度と、別の角度の二つのプレートに人さし指で触ってもらい、どちらの角度が広いかを答えてもらった。

被験者は健常者14人、軽度認知障害（MCI）患者10人、アルツハイマー型認知症（AD）患者13人の計37人で、平均年齢は71歳。

すると、正答率は健常者が80％以上だったのに対し、MCI患者は78・6％、AD患者は67・9％と、差が出た。認識できる角度の違いをみると、健常者は平均で8・7度以上の差があれば認識できたが、MCI患者は平均で13・8度以上、AD患者では平均で25・2度以上の差がないと認識できなかった。

呉教授は「『今日は何月何日？』『野菜の名前を挙げて』といった問診テストは、答えが個人の生活環境に左右される。より客観的に診断できるよう、敏感な指先の触覚に注目した」と話す。

（塩野浩子）